

「漱石遺墨」について

ご紹介した資料は、昨年五月に専修大学創立者の一人・田尻稲次郎のご子孫から大学史資料課に寄託いただいたもので、ここでは簡単な書誌情報を含めて解説を付すこととする。

本資料は縦二四センチ、横一八センチの折本仕立の画帖である。作者はそのタイトルからわかるように近代日本を代表する小説家である夏目漱石（一八六七—一九一六）。画帖の詳細については全丁を写真で紹介したが、漢詩一首と着色版画二点が収められている。

画帖を包む丸帙に「漱石遺墨」という題箋があつたことから、資料名を「漱石遺墨」としたが、このタイトルからまず思い浮かぶのが漱石没後の大正一三年（一九二四）に春陽堂から刊行された『漱石遺墨集』（全五冊）であろう。本資料はこの『漱石遺墨集』とはまったく違うものではあるが、『漱石全集 第二七卷』（岩波書店 一九九七）には清水康次氏の手による『漱石遺墨集』の書誌情報として次のような記述を見ることができると。

公刊されたものではないが、漱石の回忌の記念に作られたと思われる『漱石遺墨』の存在が報告されており、一九一八年二月三日の夏目鏡子の林原耕三宛の書簡（林原著『漱石山房の人々』、一九七一・九）には「漱石遺墨第二」とあるので、複数のものが作られた可能性がある。

この文章から漱石の書画を集めた未公刊の「漱石遺墨」が数種類存在していた可能性があつたことがわかる。

さらに『夏目漱石遺墨集 第三卷 絵画篇』（求龍堂 一九七九）所収の芳賀徹氏の解説によると、「夏目家が漱石追悼のために編んで縁故の人々に配った画帖」（以後、追悼画帖と略す）があつたという。おそらく芳賀氏の言う追悼画帖と清水氏の言う漱石遺墨は同じものを指すと思われるが、本資料との関係は後述するとして、次に内容を簡単に見ていきたい。

実は本資料に収録されたすべての書画作品は前述した『夏目漱石遺墨集』の第三卷・第四卷にも紹介されている。そのため内容についてはこの両巻の解説に拠っていることをまずはお断りしておく。冒頭の漢詩の釈文は次の通りである。

芳菲看漸饒（芳菲漸く饒かなるを看る）

韶景蕩詩情（韶景詩情を蕩がす）

却愧丹青枝（却つて愧ず丹青の枝）

春風描不成（春風描けれども成らず）

乙卯（大正四）春日

漱石山人自画

この漢詩はもともと『不成帖』と題された漱石の書画帖の冒頭に収録されたものである。また明治四五年（一九一二）六月の漱石の日記にも同様の漢詩を見ることができるといふ。

所収されている絵画作品二点のタイトルは次の通り。番号は写

真と適合している。そしてカッコ内の名称は、もともとこの作品が収録されていた画集名である。

1. 漢詩 (『不成帖』)
2. 椿図 (『不成帖』)
3. 春蘭図 (『画帖』)
4. 竹林図 (『不成帖』)
5. 藤花図 (『観自在帖』)
6. 牡丹図 (『観自在帖』)
7. 松林図 (『観自在帖』)
8. 春蘭図カ (『不成帖』)
9. 竹石図 (『観自在帖』)
10. 芭蕉図 (『咄哉帖』)
11. 椿図
12. 東家西屋図 (『画帖』)

一一点中一〇点が、『不成帖』『画帖』『観自在帖』『咄哉帖』という漱石がこれまで書いた複数の書画帖に収められた作品であった。ちなみに漱石の画集について述べると、『観自在帖』は、漱石が大正四年(一九一五)三月一九日から四月一六日まで京都に滞在した際に知り合った京都祇園の茶屋「大友」の女将である磯田多佳に、『咄哉帖』および『不成帖』は、同じく京都の野村きみに贈ったものである。『咄哉帖』と『不成帖』は後に大塚巧芸社から実物大の複製として刊行されている。

さらに漱石の書画帖に所収されていない「11. 椿図」も芳賀氏の解説によると『漱石没後、夏目家によって編まれた『画帖』に収められている」とあり、「4. 竹林図」と「12. 東家西屋図」も追悼画帖の中に収録されたものと同じ作品であると述べている。芳賀氏は追悼画帖について「夏目家作の画帖はこの四画帖のうちから適宜選択して組み合わせたものようだ」と述べていることから、本資

料は芳賀氏が言う追悼画帖と同一のものという可能性は高く、漱石の年忌の際に夏目家によって編まれた画集「漱石遺墨」の一つと考えて良いだろう。

しかし、本資料は残念ながら原型を止めていない可能性がある。今回、八木書店古書部店長・八木朗氏に本資料を見ていただいたところ、蛇腹折りの部分の一部貼り付けられている箇所があり、本来は「9. 竹石図」と「10. 芭蕉図」の間にもう一帖あったのではないかという指摘を受けた。

また同じく八木氏によると、『不成帖』などを刊行した大塚巧芸社が同じ版木を使用して作ったとも考えられるという話を聞かせていただいた。

先に述べたように「漱石遺墨」は数種類あった。本資料がそのうちのどの「漱石遺墨」に当たるかは今のところ不明であるが、本資料の公開によって、「漱石遺墨」の書誌情報を解明する一助になれば幸いである。

※本解説を記すに当たっては、専修大学文学部教授・高橋龍夫先生、東京成徳大学人文学部教授・庄司達也先生、八木書店古書部店長・八木朗氏に多大なるご教示いただいた。この場を借りて御礼申し上げます次第である。